

アリサ

泰然自若

—

斬首刑や絞首刑に処される者は、等しく何かしらの悪事、たとえば強盗やら人殺しやら扇動行為やらだが、そうした悪事をして運悪く逮捕されてしまった者が一片の慈悲も与えられず、自分の命で罪を償う行為だ。厳正なる法の名の元に、粛々と行われる一種の儀式にも感じられるというのが私も考えだった。

しかし、その儀式は私の罪によって穢されてしまったと言わざるを得ない。そも、私個人としても、このような事態になる事など思ってもみなかった。けれども、薄暗い獄中で冷たい壁を背中で感じ続けながら誰に邪魔される訳でもなく、ただただ思考の海に深く潜るようになってから、これこそ、アリサが望んだ事なのかもしれないと思い始めた。

私が死ぬという事は、先立たせてしまったアリサの後を追う事に他ならない。彼女はきっと私に追いかけて回されるのが嫌になったのではないか。いや、それとも合わせる顔がないとっていてくれるのかもしれないが、とにかくとして、私自身、こうして死刑にならず無駄にのうのうと生きてしまっているのだから、死ぬ事を諦めると言う事も選択肢の一つに入る事になるのではないか。

巡回の衛兵が私を眺めては少々憐れんでいるような瞳を向けては、何も語らず、視線を外して去っていく。気味の悪い足音が反響とともに遠ざかる。

疲れてしまった事は事実だ。隠しようもない。もう、生きる気力すら無くしてしまった。かといって、自らの手で死のうと思った事は無い。だからこそ、私は法の裁きに身を委ねた。命を奪う事にはほとんど、飽きてしまっていたからだ。たとえ、それが自分の命であったとしても。

国防の要として兵力の増員が行われる事に乗じて、私は一般の学校から編入と言う形で軍学校へ入り、僅か三ヶ月の訓練で前線のロー・ボーウッド城塞都市に派遣されたのが、大体、三年ほど前の事になる。夏の終わりが見える八月だった。

英雄に憧れたわけでもなければ愛国心に滾っていたわけでもない。金に困ってしまっていたところ、親から勘当同然に放り込まれたのだ。学校では授業に出ず、遊び呆けていた、というわけでもないが、中々に初めての一人暮らしと言うものは金銭感覚を惑わせた。思えば借金もそれなりにこさえてしまっていたので、私個人としても軍に入った事は人生の清算をすませる事が出来たようで、非常に有り難かった。

ロー・ボーウッド城塞都市の荘厳かつ堅牢な城門を潜った先には、多くの軍人がせわしなく動き、民衆は尊敬の念を込めて私たちを歓迎してくれる。そのような妄想があった。募集の謳い文句にもそのような青臭い英雄話を乗せていたのだから、幾人かは本当に騙されて前線に来てしまった事をこの時、知ったはずだ。

綺麗に整備された道路が伸び、活気にあふれた市が広がっていた。軍人たちは軍服を着崩し、ある者は酒瓶を持って路上で眠り呆けていた。異様な光景ではない、むしろ、ここが前線基地などと言われていなければ、平和な町で私たちの気分も苦笑いを浮かべる程度には、余裕を持たせただろうが、ここは生憎と血みどろな戦争が行われる前線基地で、重要拠点だと軍学校では教えられていたのだから、私たちが啞然とするのも無理はなかった。

憤る者も少なからず居たが、そのような熱い思いは一月、二月と平和が享受出来てしまえば、冷めてしまう物で、私たちは自然とこの町の規則に適応して生活出来るようになって行った。前線基地といっても、ここは城塞都市、本当の前線は未だ彼方に存在し、私たちは戦場を知らないまま身の入らない訓練を終えると、平和を享受しに町へと繰り出しては給金を使いきって、ツケておいてくれとのたまうのであった。

そのような平和の中で、私は行きつけの喫茶店を見つけ出していた。一人でフラッと立ち寄っては食事をする事もあれば、珈琲を嗜むだけで本を読む。そのような世界がたまらなく、この町には不釣り合いに思えて大好きだった。初めは一人だったが、いつからか、常連客となり、いつのまにか、常連客と語らう事になり、自然と給仕をしていたアリサと声を交わすようになり、彼女の部屋へ何の躊躇も無く入り込めるようになっていった。

かといって、心のそこから愛している。大好きで、結婚したい。という思いがあったと言えばそれは、嘘になる。そこには、高貴な異性への情欲も無ければ、打算的な利己主義も無い。ただ

、垢抜けないそばかすが特徴的な少女の面影を残すアリサを好きだとか愛しているというよりも、その素顔を、その姿勢を、彼女の一挙手一投足を鑑賞していたい。そのような不純極まりない考え方を持っていた。人間様をまるで美術館に展示されている彫刻や絵画と同列に扱ってしまっているのだが、そう思う事によって、一層、私は心の内に眠っていた熱いものが滾った。背徳感なのかもしれないし、他者とは違った価値観によって優越を感じていたとも言える。たとえようのない高揚に、足しげく通い、やがてはアリサの内にも、私に対する恋慕が出来上がったはずだ。そうでなければ、私のような男に何度も会う事はしないだろう。かと思えば、私は遂にアリサと情事に耽る事も無かったのだが。

あくまでも、彼女はアリサという名の作品でしかなかったということだ。私の所有物であり、私のお気に入り、私以外には彼女の美術的価値を理解できない。酷く、歪んだ独占欲だった。人を人として見ないながら、その当人を独占し、自分の物として所有している気になっていたのだから、おかしい性癖だと、今では苦笑いを禁じえない。

毎日のように出会っては他愛もない話を語り合った。私が喋り、彼女が相槌を打つという一方的なものでしかなかったが、嫌な顔一つせずに話を聞いてくれたアリサはとても、貴重な存在だった。

一年も前線基地に居座れば、流石の私も戦場へ駆り出される機会が幾度となく訪れていた。秋風が肌寒く感じるようになった十月までには、三度の大きな戦場を経験し、二度の負け戦から生還していた。そのどれも奇跡的に命を捨てる事も無く戻ってくる事が出来たのだが、見るからに戦友と呼べる士官候補の同期生は減って行った。

多くの戦友は戦争だから仕方ないという思いよりもまず、戦場に立った事による興奮と人を殺した感触が忘れ去られる事は無く、初めてこの町で出会った酒に溺れる兵の姿が思いだされてしまっていた。

怠惰な思い。何のために戦うのか、何のために命を捨てるのか。それらに迷い、それでも生還してしまった同期達は醜悪な臭いを振りまきながら、甲冑を脱ぎ捨て、戦場で着た軍服のまま酒を飲み、煙草を嗜み、乾燥させた何かしらの草――時折、草売りがやってくる――のお香に溺れた。

私は色々と幸運だったと言える。人を殺す意味を見つけ出す必要もないほど健常な精神状態を維持する事が出来たからであり、その一因もまた、アリサという存在が大きかったとも言える。彼女との会話が私を安らぎの極致へと誘うのだ。誰もかれもが墮落した生活に現（うつ）を抜かしては上官に怒られ、だらけた訓練に勤しむ。ある者は怪我を理由に部屋に閉じこもり、やがては自ら命を絶った。最後まで、斬った相手の断末魔が耳から離れなかったという。

軍の編成も行われ、我々士官候補生も欠員の補充とばかりに別々の部隊に配属されていった。私もその例から外れる事も無く、歩兵部隊へと配属され、槍やら盾やらの捌きに磨きをかける訓練に汗を滴らせることになった。それでも、私にはアリサが居り、私もまた辛くはあったが、自ら死を選ぶという選択肢も無かった。もちろん、酒も煙草も嗜んだが、あくまで嗜みという範疇で済ませる事が出来た。アリサは言った。「貴方は人間として出来ている」と、私は軍学校に入るまで自墮落な生活を振り返り、愛想笑いを浮かべて見せた。何が悪く、何が良い。何処までが許されて、何処までが怒られる。この線引きをただ漠然としていたに過ぎないのだが、ここには過去の私よりも愚かな人間が多かった。いや、製造されてしまっていた。

私よりも成績が良く、上官からも評判だった戦友が、今では女と博打に挟まれて、裸一貫で戦場へ出かけることになってしまいそのまま帰らなかったし、訓練では上官から候補生の指南役に抜擢されるほどの戦友は、左肩を矢で射られ、満足に腕が上がりなくなったが、退院を促されても今だ病院から出てこようとはせず、ぶつぶつと何かを呟いているという。

戦場が、戦いが、人殺しが。正常だった、健常だった者を墮落させ、怠惰な人間へと変質させ

ていく。その様な中で、私だけはあるがままの姿で居るような気がしてならなかった。と同時に、私の中でアリサという存在が無意識ながらあまりにも大きくなってしまっていた事に気づきはしなかった。

恐らくは、既に手放す事など出来はしないところまで行っていたであろうか。それも都合の良い解釈で、たとえ、私が浮気をしてもしもアリサは怒らないだろうとか。結婚しなくとも、彼女は私をずっと愛してくれている事だろう。などと、いかに私が彼女の事を見下し、楽観していたかが今なら、この薄暗く皆に平等な冷徹な態度を見せる牢獄にいる今になって、ようやく理解する事が出来ていた。

これは、そう。仕方のないことだった。けれども、私にとって、それは本当にどうしようもなく、予期せぬ出来事で、頭は真っ白になったのだ。

二年目の春。初夏の臭いがかすかに鼻をつくようになったころ合いだった。私は秋からさらに戦場を経験した。野戦でぶつかりあう事はなかったが、偵察や補給を行う部隊で指揮を揮う機会も訪れていた。国から、勲章ももらったが、そのような飾りが戦場で役に立つ事は無く、同期で私と同じ勲章をもらった者は、その勲章ごと戦場に消えた。私はその勲章をアリサに渡した。戦場に持っていくには邪魔だった。上官からは身につける事が名誉だと言われていたが、名誉は果たして私の命を護ってくれるのだろうか。私が敵ならば、勲章持ちと判っている兵など真っ先に狙い、武功を挙げようとするだろうし、現に同期で戦場に消えた戦友はその餌食になったのだ。

だからこそ、私はアリサに持っていてほしかった。そして、受け取る事が当然だとも思っていた。馬鹿な事だと思うだろうし、今の私もそう思う。私はその当時、アリサは私の物だ、という認識すらなかった。当然。そう断言できる何かしらの根拠もなく、確信していたのである。だが、ものの見事に勲章の受け取りを拒否されたのである。呆気らかんと、さも当然のように、それでいて真剣な眼差しで、アリサはこのようなものを受け取るわけにはいかないと言った。

激怒するよりも先に、言いようもない消失感が私を襲った。が、そのような私を知ってか知らずか、彼女は綺麗でいながらも胸やけしない笑みを私に向けたのだ。戦場から帰ってきたのなら、その勲章とともに顔を見せてほしい。そう言って私の手を、勲章ごと握り締めたのだ。何という存在なのだろうか、と私は思った。続いて、予期も出来なければ我慢も効かず、涙が数滴も頬を伝っては、落ちた。

アリサは何と出来た人間なのだろうか。彼女と出会えた事は私の人生にとって最良かつ最大の幸運だったと言える。だからこそ、感謝してもしきれない。

その出来事から、私はただひたすらに、戦った。アリサの待つ喫茶店へ、アリサの部屋を夢しながら、アリサと語らう事を目標に。戦場に出れば生きる事だけに執した。その時からか、人間を殺したところで何かが抜け落ちる、妙な徒労感を覚える事も無くなった。戦うごとに、生き延びるごとに、身体が漲った。嘘ではない、その出来事が起こった春から、雪降る二月の冬までに大きな負け戦を経験する事になったが、不思議と私は電軍の最中において生き延びた。逃げ延びたわけではない。むしろ、単身で逃げようとしたものを見かけなくなったのだから、私の行動はまさしく正道だったのだと確信している。

敵の奇襲によって陣形の側面が混乱に極まった。遊撃としていた騎馬隊は五十余騎だったためか、側面からの奇襲を行った百を超える軍勢に成す術もなかったようだ。またたく間に情報が錯綜し、中軍に控えていた私の元に、先駆けの部隊が敗走したという大声が聞こえてきたと思えば、今度は後方と左からも敵ということで包囲されてしまったという大声が響いた。こうなっ

てしまってはもうどうする事も出来ない。私はそのような事はありえないと断言できた。包囲されているならばもっと激しい檄の声と、矢の雨が中軍に降り注ぐはずだったからだ。

が、数百と言う人間の思想全てを掌握出来るほど、私は信望も、指揮能力も、声すらも大きくは無かった。後詰めが撤退を始めると中軍は、先駆けとして前線を作っている味方を放置して逃げだし始めた。それも、蜘蛛の子を散らすように四方へと走ったのだ。これでは他の隊も負け戦だと判断して全軍が撤退してしまうのも仕方のない事だった。

私も逃げようとした。けれども、それは叶わなかった。上官は殿軍を引き受けてしまったからだ。先駆けの部隊を救出するために、決死隊が組まれ、私はその一つに組み込まれた。先駆けの部隊に後方が既に敗走したので、早急に逃げよ。という情報を与えるためだ。

馬になど乗ってはいない。私たちは十人ほどの分隊を三つほど作ると、徒歩で前線へと向かった。しかし、前線などもはやないようなもの、先駆けの部隊が居るところが前線でそれこそ、線などではなく、点でしかなかった。左右から敵軍が押し上げてくるのが判った。鳥のはためきと左右から轟く裂ぱくに大地が震えている錯覚を覚えた。決死隊の中でも当然逃げ出す輩が居たもので、先駆けの部隊に情報を与える時には、いつのまにか私を含め四人しか残っておらず、あろうことか他の分隊は消息不明と言う有様であった。

既に、周囲は包囲されている。正真正銘の死地であった。皆は唇を震わせていたが、青白い顔をしている者もいたが、大部分は高揚し、目が血走っていた。その両極端な様相に、私は段々と落ち着きを取り戻していった。生き残るにはそのどちらの感情、どちらの態度も正しいとは思えなかったからだ。私はただ、アリサの顔を思い描き、どうすれば帰る事が出来るかを考えた。

思いついた事は至極単純だ。包囲を突破することに他ならない。が、包囲は完成していると考えれば、左右と後方は士気が高い事も推察出来、かといって包囲が敷かれていない場所など罨でしかないだろうと思った。部隊は徐々に瓦解していく。逃走する者が出始めている状態で、良く持ちこたえていたとも言えるが、もはや負けは必至。ならばと思い、私は部隊を指揮していた上官に進言した。

前方部隊の側面を削るように突破してみてもどうか。

上官は暫く呆気にとられたが、矢が耳を通った後に突然大笑いをして、案を採用した。始まったのは、撤退だったが、敵からは突撃に見えたであろう。真正面から食いかかろうとする怪我を負った猛獣と喩えるならば本当に聞こえは良いが、そんなもの現場において構ってられる考えではなかった。皆が必死だった、生き延びるために、生き延びて朝日を拝み、酒を飲み、煙草を嗜み、女を抱く。家族の顔を見るか、愛する女と笑い合うか。

思えば、その時、私と突撃し逃げ延びた者たちは同じだったと思える。何かのために、自分ではない。何らかの物や命のために、自分の命を燃やし、たとえ、燻ぶるほどに弱くならうとも生き延びてやるという確固たる決意を持って、ともに行動できていた。だからこそ、私たちはあの時、声が枯れるまで叫んでいたのではないだろうか。理不尽な現実に向かう勇気を振り絞るために、自分の夢想する快楽や極楽のために、無我夢中で、突き進み、人を殺し、味方を見捨て、傷付こうとも、前へ前へ前へ。

本陣に到着した時、生き残った者は二十余名だった。悲しい事に、中軍も後詰めも、戦線を離脱して陣を敷く事無く、撤退をしていた。私たちは歩き続けた。前方に脱出したのだから、そのまま大きく迂回する必要があったからだ。足を止めれば敵の勢力圏内、いつ敵が襲ってくるかもわからない。その恐怖の中、四六時中緊張感を持って神経をすり減らし続けながら、本陣にたどり着き、私たちは死んだように眠ったのだ。

撤退戦で献策し、生還したとの事で、私にはまた勲章が増えることになったのだが、生憎とその話を聞いたのは野戦病院よりは幾分ましでも、血生臭さが抜け落ちないロー・ボーウッドの病院だった。重傷者の病室で、私は三日間も眠り続け、一時は死ぬ瀬戸際だったそうだが、奇跡的に回復を果たし、目を開けたのだという。

目覚めて聞いた第一報が勲章の話で、私はそんなことはどうでも良い、戦争はどうなった。と問いかけたそうだ。もっとも、そうだ、ということで記憶には無いのだが、とにかくその問いかけに戦友は笑って言った。休戦条約が結ばれる事になり、戦争が終わるとの事だった。

戦友は笑っていた。医師も心無しか安堵の表情を見せるかのように顔面を緩急させた。が、私は不服だった。思惑は判るのだ。戦争なんてものは所詮、政治の延長でしかない事を。私も学生時代ならば納得できただろうし、そのような政治と戦争に関する知識を、広く浅く仕入れていた。が、今はそのような知識を持っていたところで、湧きおこる不服と憤怒はどうしようもなかった。ただ、その思いを激痛が和らげる方向に左右するとは思ってもみなかった。

私は、目が覚めてからひと月は病院のベッドでうめき声と、励ましの声による合唱を聞く羽目になった。退院しようにも、私は太ももや肩に矢が刺さり、満足に歩く事も出来なかったうえ、足の怪我、下手をすると出血が多くなり一歩間違えばそのまま死ぬ危険すら起こってしまうような場所だったというのだから、大人しくしなければならなかった。

はやる気持ちがあったのは当然のことだ。アリサの顔を見ていない。そこには一種の焦燥感があったと言える。禁断症状か、枯れ草のお香を常用していた戦友が手足を震わせながら、金をせびり、その用途がお香を買うためだと言っていた。その時に別の戦友が言った禁断症状と良く似ている。もっとも病室にいたころはそのような事は微塵も考えなかった。ただ、彼女の笑みを、彼女の声を聞いたかったのだ。純粹に、そうだと、あの時生き残ろうとしたのはアリサとまた出会うためだったのだから、生還してから病室に軟禁では生殺しも良い所だった。

結局、私は歩けるようになると早々に病室を抜けだした。今だ長時間歩く事は出来ない。痛みが走り、傷が開くかもしれなかったからだが、歩ける事に私はとにかく歓喜してその喜びをもっと増大させようとアリサの部屋へ向かったのだ。だが、思うように身体は動いてくれなかった。それもそうだ、一月以上も寝たきりで、久しぶりに立ち上がってみるとあまりの高さに眩暈を引き起こしたほどだ。歩けるようになるまでに半月はかかり、外出という脱走をやりとげたのは目覚めてから二月と三日が過ぎた頃合いだった。

昼過ぎに抜けだし、ずるずると引きずって歩いてみると、想像以上にアリサの部屋は遠かった

。汗だくになり、足の痛みと戦いながらいよいよをもってアリサの住まう地区に入り、喫茶店を見つけ出した。部屋は近い、喫茶店の裏手がアリサの借りている部屋があった。壁伝いに手を添えながら、必死に、ただアリサの顔を思い描き、私はアリサの部屋の前に立ち、ドアノブに手を掛け、勢い良く開け放った。

思えば、これは酷く失礼かもしれないが、どうしてアリサはあの時、鍵をかけていなかったのか。今更、不満に思ったところで、どうしようもなければ避ける事も出来なかった。

私はただ、その場から這うように逃げ出した。見知らぬ男の声と、アリサの楽しい喘ぎを残して、ただただ、私は逃げた。真っ白だった。そう、あの戦場を駆けたとはまったく正反対に、ひたすら無心。何も考えず、身体を動かし、病室へ逃げ帰り、医師のお怒りに耳も傾けず、戦友のおどけた会話や、心配する優しげな声を無視しながら、眠る事に努力して、結局は眠れず、夜の薄暗い病室に響く、寝言やいびきやうめき声をひたすら聞いた。

今でも良くは思い出せないが、きっと、あの夜の事だろう。月明かりもないただ蠟燭の儂げな光に照らされる中で、私はアリサを殺そうと思ったに違いない。

ホウ、ホウ。これは、何の鳴き声だろうか。聞きなれた声だが、この声が一体何者によって発せられているかを考えた事も無かった。かがり火にくべられている木が弾け、鋭い音が耳を刺した。夜も更けた。この夜更け、活発に動くのは鼠達だった。彼らには何かと苦労させられたもので、とにかく軍服を放置しておいたりすると何故か、食われてしまう。虫に食われるならばまだ判るが、面白いもので、袖口に良く穴をあけられたものだ。

あの夜から、私は眠る事が億劫になったと言える。もちろん、眠ることはする。でなければ、ここまで落ち着いていないだろうし、外向きな健常を振りまく精神状態を維持できない事になるだろう。寝不足によって気狂いした戦友を何度も目撃している事が、妙なところで私の自我を維持しているとも言える。

きっと、私はどこかで死にたくは無いらこそ、アリサだけを殺した。そうでなければ、アリサを抱いたであろう男を放置しておくはずはないのだ。あの現場から逃げ去ってさらに一月半は経った頃か。あれ以来、アリサは私の元を訪ねて来ていた。何を思って、会っていたのか。いまいち覚えていない。どんな顔をしていたのか、それは私の顔も、アリサの顔も思いだせない。ただ、会っていたという証言が裁判で成された事だけは事実で、その時、周りの人間からすれば、中睦まじく見えたそうだ。

とんと、記憶にないのは不思議な事である。

扉がゆっくりと開かれた。巡回がまた通るのだろうが、さみしいもので、誰もかれも牢獄の中に住まう住人は息を潜ませているようだった。

目を閉じてみると、殺した相手が浮かび上がる事があるそうだ。私はお目にかかった事が無いが、多くの戦友はその症状に悩まされていた。

私は、殺した時の事を思い出してみる。それは不快感もなければ、後悔すら湧き起こらない。かといって、アリサは死んで当然だったとも、思えないのだ。酷く、空虚、という単語が今の私には似合う。それでいて、かつての戦友たちのように惰眠をむさぼるようになっている。自分自身に対しては、不快だった。と同時に、私は戦友たちを侮蔑していた事も今になって理解できるようになった。何もかもが遅いかもしれないが、今だからこそ、アリサを殺したからこそ、今の境地に立てたのだから、後悔があるはずもなかったか。

このまま、死ぬ事もなく、生き続けるのも悪くはない。何もせず、規律に則り生活するだけで衣食住を供給してくれるのならば、その流れに乗るのも選択肢の一つだ。

が、望むのならば、堅い靴底を床に打ち付け、音を反響させながら私の元にやってきて、死を授けてくれる存在を求めたい。もう、死ぬ事に疲れたのだ。

嗚呼、きっと私は、殺してほしいからこそ、男を殺さなかったのかもしれない。

戦友を、どうして涙を流すのだ。それは怒りか、それは憐れみか、それは葛藤か。

良い良い。私にそのような高貴な思いをぶつけることはない。

ただ、あのときのように、そう。戦場のように、数多の命を刈り取るように、私がアリサを殺したように、一片の慈悲も無く、殺せば良いだけなのだ。

さあ、殺せ。思う存分、私を殺せ。

七

あまりの眩しさに瞼を開く事も億劫になったが、せっかく目が覚めたのだから目を開けるべきだろうと思い、目元を力ませながら視野を広げて行く。

嗚呼、朝が来た。

手足を動かそうと蠢かすものの、私の四肢は言う事を聞かない。拘束具の擦れる音だけが耳に残り、怠惰な私の一日が始まった事を実感させた。

何故、私は生きているのだろうか。

鳥のさえずりが遙か彼方で聞こえているような気がする。鳥たちは自由に空を飛びまわり、自由気ままに餌をとり、所構わず糞をして、愛を育み、子を育て、やがて死ぬ事だろう。

なんて、なんと羨ましい人生だろうか。

何故、私は死ななかったのだろうか。

口に出す事も出来ない思いは何度も頭の中を駆け回り、やがて、考える事も面倒になった。

とにかくにも、好い朝だ。私は、ほほ笑む事が出来ただろうか。

アリサ、私は今笑えたのだろうか。なあ、アリサ。私のアリサよ。

<了>